

たわめられた人

受難節第一主日を迎えました。4月9日の復活日までの日曜日を除く40日間、わたしのためのキリストの受難の道行きに思いをはせ、その背後にある神の憐れみと慈しみを覚えたく願っています。

今朝は旧約聖書のヨブ記から、御言葉に聴きます。ヨブについては「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けている」と神がこのような人物はほかにいないとサタンに向かって言うような人物でした。ちなみに無垢というのは罪がないということではありません。「その時代、ノアは神とともに歩む無垢な人であった」と創世記6章にあるのですが、無垢とは自分をたよりとせず、神と共に歩む人、神さまをカッコの中に入れてしまわずに、神さまとの関わり、交わりの中で生きている人を指す言葉です。だからこそ尚更、自分がなぜこのような苦難を受けるのか、自分は神に背くような何かをしたのだろうか、とヨブは苦しむことになります。ヨブ記がわたしたちを引き付けるのは、人生に突如として降りかかる不幸や災難、そして引き起こされる苦しみ、自分に優しいと思われていた世界が突如牙をむいて襲いかかってきたと思われるような人生の不条理に対する人間の側からの異議の申し立て。なぜわたしはこのような目に遭うのか。苦しまねばならないのか。この苦難の意味を教えてほしいという血を吐くような叫び。そうしたヨブの苦悩に、苦しみと無関係に生きることのできないわたしたちの心が共鳴するのであろうと思います。人類普遍の問題に真正面から取り組んでいるのがヨブ記です。まずここまでの流れを簡単に追っておきますと、ヨブは地域の有力者であり、財産も非常に多く、家族にも恵まれ、何よりも神を畏れる敬虔な人物として尊敬を集めていました。しかしサタンはヨブが敬虔なのは、神よ、あなたが彼を保護しておられるからだ、そうでなければヨブは神を呪うだろう。所詮は現世利益だと言ったのです。

そこで神は、ヨブ自身を撃つことは禁じましたが彼の財産、家族を撃つことを許します。こうしてその日が訪れます。ヨブのもとに家来が次々とやって来て彼の財産である家畜が異邦人たちに襲われ、奪われたという。時を移さずまた家来が来て突如突風が吹き寄せ、家が倒れて宴会を楽しんでいたヨブの子どもたちが皆亡くなったと告げるのです。まるで大津波がやってきて一瞬のうちにすべてをさらって行ってしまったかのように、ヨブは一日のうちにすべてを失ってしまいます。あまりの出来事に、神を呪って死んだらどうかと妻は言うのですが、これに答えたのが有名な、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこへ帰ろう。主は与え、主は取りたもう。主の御名ははむべきかな」という賛美でした。ヨブは敬虔な姿勢を崩しませんでした。ここまでが1章に書かれていることです。

そこでサタンはもう一段、災いの脅威をあげて、今度はヨブ自身に重い皮膚病を送ります。そうすれば神を呪うだろうというのです。今日の箇所ですね。彼は頭のとっぺんから足の裏に至るまで出来物に覆われ、それを陶器のカケラで搔きむしったので皮膚は破れ、血は流れ、かさぶたと膿で見るも無惨な状態になりました。全てを失い、残骸のようになったヨブを見て、彼の妻は「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬほうがましでしょう」といいます。この意味は、最初に無垢の意味を説明しましたように、神に従うことに意味があるのか、あなたを保護しない神など、呪って、死んだらよいではないか」というサタンの考えている人間とはこういうものだという線に沿った発言のようにも思われます。しかし、これに対してもヨブは「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」と唇をもって罪を犯すことはなかったと記されています。幾つかのことがわかります。「お前まで」とあることから、すでにヨブの状況は知れ渡っています。「人の不幸は蜜の味」というイヤな言葉を聞いたことがあり

ます。ヨブの身に起きた不幸、財産や子どもを失ったこと、また突如全身を覆う皮膚病によって無惨な有り様と成り果てたこと、当時の一般常識からいえば、これは何か神の背く悪いことをしたに違いないと、のちほど友人のひとりがお前には隠れた罪があるに違いないと責め立てる、ヨブのことは人々の話題になっていた。とうぜん、それは友人たちの耳にも入り、見舞いに三人の友人たち、エリファズ、ビルダド、ツォファルも駆けつけますが、ヨブに起きたあまりの事態に一週間は声がかけれなかったと記されています。ここまでが、ヨブ記全体のプロローグといえますか、問題設定の部分、ヨブにこういう事態が起きたという箇所です。もうすこし整理しますと、ヨブを襲った試練は、三人称、二人称をへて、一人称へと移ってきたことがわかります。財産というモノから、次に自分の身内である子どもたちに、そして、ついに自分自身の出来事となる。彼ら、お前たち、わたしという順序です。サタンは1章でヨブの身の回りを撃ちましたが、2章にいたって本人を撃ったのです。言うならば他人事から我が事へと災厄のレベルがあがったことになります。またこのヨブが皮膚病で足の裏から頭のとっぺんまで苦しんだという描写は、さきほど少し申し上げましたが、現代のわたしたちが考える以上に厳しいものがあって、これは申命記で神に呪われた者が受ける罰として記述される病であったことです。ここにしるしとしての病といえますか、古代にしばしば見られた因果応報、神に敵対したり、背いた結果、こういう罰を与えられたのだと判断される状態にヨブは陥っているのです。これは病気がたんに身体に重荷を追わせるだけでなく、しばしば社会的な意味をもって人を疎外する。追い込む事例でもあります。病の苦しみに人々からの誤解・無理解、差別、侮蔑を浴びせられる立場に置かれてしまう。しかも、ヨブには神に背いたという自覚はないのですから、この不条理がな

おさらに身に堪えるのです。この不条理との戦いがヨブ記のテーマのひとつです。

今回、受難節にあたって、この病にさいなまれるヨブの苦しみ、悩みに寄り添ってみたいと考えました。身につまされることが増えたというのがあります。ひとは病む時、自分の罪を思うものです。時間だけはあるので床に伏せって、いろいろと考える。なぜ、どうしてという原因探しが自然に始まります。これは理性をもった人間のさがのようなもので、ふだん自分の役割に生きることが出来ている時には、忙しさにまぎれて考えずに済んでいることを、病になることで、立ち止まらされて考えることになります。病気というのは身体が正常に機能しない状態ですから、からだが SOS を発している状態なわけで、その原因を除去できれば日常に復帰することが可能です。しかし、その病気が回復の見込めない場合、またあまりに長すぎる場合、どうなるでしょうか。1週間で退院しないと会社に迷惑をかける。子どもの送り迎えができない。だれが食事をつくるのだろうか、そういうレベルの出来事からはじまって、やがて自分を抜きにして周囲がまわるようになってゆくと自分の存在意義が失われたように感じられる。見捨てられたような、詩篇の詩人がしばしば歌ったように、彼らは自分を生きながら陰府に降ったものとみなす、今風にいえば「終わったね」という状況。そうした病ゆえに隔離された状況が人をたわめてゆく。まげてゆく。これはわたしたちが自分の生きる意味をつねに考える理性をもった存在だからです。つねに自分なりの価値、あるいは世間の評価との兼ね合いで、自分という存在の価値を測っている。生きる意味が自分のなすこと、周囲への貢献度といったもので評価される世界、いうならば自分で作り上げた意味の世界に生きている。もちろんその自分で作り上げたというのは、自分の生きる社会と無関係に作られるものではありませんから、この社会で良しとされていること、喜ばれることに沿った意味の世界

ですね。第二次世界大戦中の日本人と今とでは、評価される生きる意味や目的は違っていたでしょう。この意味の世界に生きている「わたし」という条件が、突如襲いかかる試練、ヨブを襲った中には突風が吹いてテントが倒れて子どもたちが下敷きになって死んでしまったというのがありましたから、自然災害のレベルや、盗賊に奪われた家畜のように、この世の暴力や、悪意にさらされて訪れる事態や、みずからが皮膚病にかかって苦しむことなど、およそ人間が経験しうる苦しみ、不幸が重なってくる。そうしたことによって、これまで彼を支えていた意味の世界が崩れてゆく。これを不条理と言って良いわけですが、この不条理との戦いです。「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」、「わたしたちは神から幸福をいただいたのだから、不幸をもいただくのではないか」、そう言って神を呪うことをしなかったヨブは、3章に入るとついに口を開き、神ではなく自分の生まれた日を呪い始めます。肉体にかかる負荷がついに彼の心を折っていく。竹林の竹が雪の重みでたわめられた末についに折れるということがあるそうですが、それに似て許容量を超えた負荷が人間の心を折る、そういうことでしょうか。わたしはここでヨブの心がたわめられていったのは「なぜ」という問いではなく、「いつまで」という問いではなかったかと思うのです。「なぜ」という問いについては、彼は答えを持っていました。「裸で母の胎を出たのだから」「良いものを頂いたのでから」、そう理性に言い聞かせることが出来た。しかし、「いつまで」この状態に置かれるのか、もう十分ではないか。試練を神からの教訓と捉えるとき、この「いつまで」というのがきつい。時間がわたしたちの敵となる。神は永遠をお持ちですが、人間はそうではない。わたしたちの有限性が、この苦しみを切実な避けがたいものとする。心といえばいいのか、魂といえばいいのか、あるいは霊といったらよいか、わたしが考える私自身の中心

というような意味で聞いていただければよいのですが、わたしたちは、この肉体、からだなしには、意識を保つことはできません。その意味では心・魂・霊は体に依存しています。だから体のもつ有限性に、心・魂・霊が影響されるのはとうぜんのもので、そこに苦しみの根があります。与えられている体のために、わたしの心や理性が手前勝手な申し出を始める。悲鳴をあげる。これはもう終わってもいいはずだ。終わらないなら神などいない。神には力がない。これはある神学者が述べたことですが、「人間は自分自身に目をむけ、思索の対象とすれば自分が地上の多くの被造物のひとつにすぎないことに気づく。しかし、自分自身の外に目を向ければ、自分自身の心の世界全体の中心であることに気づかされる。この内と外を混同すること」が危険だということです。死なない人間はいません。これは想定内です。しかし、自分の死は想定外という、利己的な考えは、つねに自分を中心とした意味の世界に生きていることから生まれるのです。この罫から逃れるには、命の中心であり、源である神との関係を再確認することです。ここが破綻すると、人間は一気に死と滅びに飲み込まれてしまいます。自分自身を全体の中心に据えてはならない。ヨブの凄さは徹底的に神を対話の相手として指名したことです。無垢な、と言われたように、神と共にまると歩んだ。その姿勢を学びたく思います。それではどうしたらよいでしょうか。苦難や試練によってたわめられたとき、わたしたちは周囲を見て生きていた状態から、俯いて自分の内側を覗き込みます。そして原因を探し始める。そうではない。顔を挙げなければならない。自分という閉じた蝸壺の中にではなく、神を仰ぐことです。讃美歌に「こころを高く上げよ」という曲があります。「心を高く上げよ、主のみ声に従い、ただ主のみを見上げて、心を高くあげよ」と歌われる歌詞をみなさんもお存知でしょう。礼拝のはじまりに歌われることの多い讃美歌ですが、わたしたちの心が、神に背

いているとき、それはまるで罪の力に引かれるように自分の内側を覗き込み、罪と死の重力にひかれてしまう。心がふさぎ、絶望に閉じ込められてしまう。ですから、わたしたちは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、わたしたちに語りかけてくださる方の呼びかけに応え、顔をあげるのです。それがわたしの目を、自分の外へ、神の御顔を仰がせ、命の方向へと導くものとなります。なぜならば神は天地創造の神であり、その御言葉によって闇のなかに光を輝かせ、混沌に秩序を与え、わたしたちの歩むべき道を示される方だからです。聖書において神は何を約束してくださっているか、なぜキリストは十字架にかかれたのか、その出来事が意味することに全身全霊を向けるのです。そこから罪の赦しの宣言を聴くことが救いへの道です。

説教が長くなりすぎますのでこれで終わりにしますが、今日は、このあと聖餐式があり、そこで使徒信条を朗読します。我は天地のつくり主、全能の父なる神を信ず、我はその独り子イエス・キリストを信ず。そして、最後に三位一体の神の位格である「聖霊を信ず」と告白します。これは何を信じるのでしょうか。わたしはこれは聖霊によらなければ決して信じることの出来ない希望、すなわち「罪の赦し、体のよみがえり、永遠の生命を信」じさせて頂くことだと思います。苦難や試練はわたしたちを折ってゆく。しかし、人は打ち倒されても見捨てられるのではないと言われるように、被造物である以上、わたしたちはこの世界からそれぞれの仕方で退場してゆかねばなりません。体の不調で、病で、災害で、事故で、しかし、それはわたしに意味や価値がなくなったからではないのです。キリスト・イエスをお遣わしになったほどに、わたしを愛して下さった神がおられます。キリスト・イエスご自身が、ヨブ以上に、神に捨てられて死ぬという罪人の死を正しい方として味あわれました。キリス

ト教は十字架の宗教です。そこにおいて苦難と死が、命に変えられることを信じる宗教です。このキリストという中心を見失わないこと、どんなときも神を仰ぐことが救いです。神の独り子の十字架における死という、およそ考えられない出来事によって、すべての不条理をご自身の永遠の命の中に、失われることのない者として守ってくださった。この神の摂理、恵みのご支配の中に自分を位置付け、見出すことこそが、恵みの福音であることをともに確認したいと願います。

お祈りいたします。